

Contents *****

| | |
|------------------------------|-----|
| 特集：経済と安全保障から見た米中関係 | 1p |
| <From the Editor> 「ソートリーダー」論 | 10p |

特集：経済と安全保障から見た米中関係

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

今年最初の号では、昨年11月28日に「霞山会」で筆者が行なった講演録をお届けしたいと思います。財団法人霞山会（かざんかい）¹といえは東亜同文会の歴史を汲み、日中関係の中枢を担ってきた存在です。そんな場所で中国初出張の報告をするのは、われながらいい度胸という気がしますが、これはよく知らずに引き受けてしまった自分が悪いとしかいいようがない。

恥のかきついでに、この内容は霞山会発行の月刊『東亜』²1月号にも掲載されています。自分の記事は棚に上げて、この雑誌は中国関係の格好の情報源であると宣伝しておきたいと思います。

初めての中国出張

吉崎でございます。よろしくお願ひします。（拍手）

正直に申し上げますが、私は中国に行ったのは今回が初めてでございます。エコノミスト業界でも、吉崎は一回も中国へ行ったことがないのに、よくまあ中国経済について書くよなといって、呆れられているような次第でございます。そんな人間が、霞山会の皆様の前で何を話そうかと弱っております。ただし、私はちょっと珍しい経験をしてきましたので、今日はその辺をなるべく加工せずにご紹介して、後は皆様にご判断いただければと思っております。

今回の出張では、外務省OBの岡崎久彦さんが

やっておられる岡崎研究所の特別研究員として、十月末に台湾へ、それから十一月には中国で二つの日中対話に参加することができました。

台湾では、日本とアメリカと台湾の三極対話をしてきました。これは二〇〇二年から始まった最初のラウンドが終了して、今度また新しいラウンドを始めようということで、第一回目が十月末に台北で開かれたものです。アメリカの代表はヘリテージ財団で、共和党系で保守的な親台派の人たちです。それに民進党系の台湾シンクタンクと岡崎研究所の三者でやっております。

もう一つの日中対話は、これはもう五年ぐらい岡崎研究所が続けておりまして、北京では中国社会科学院、上海では上海国際問題研究所と定期的

¹ <http://www.kazankai.org/index.html> ホームページは左記をご参照。

² <http://e-asia.kazankai.org/toa.html> 同上

に会合を続けております。今回ちょっと人数を増やすことになり、経済問題も入れようということで私も呼んでもらったわけでございます。

丁発止の日中対話

私もいろいろな国の国際会議に出ておりますけれども、この日中対話は本当におもしろかったです。あの中国が、あの岡崎研究所をわざわざ呼んで話をするわけですから、優しい語らいをするわけではありません。岡崎研究所側も靖国問題から憲法問題まで、一太刀浴びせてやろうという人たちがばかりです。お互いに手ぐすねを引いて、相手を言い負かそうという緊張感溢れる国際会議は、私も初めての体験でした。

北京と蘇州で二つの日中対話をやっております。向こう側の日本研究所の人たちは、三分の二くらいは日本語が分かるのですね。一応会議は通訳を介するのですが、ほとんどなしでもいいくらい向こうは分かっている。ただし、職業軍人の教授を呼んだりしていますので、やはり通訳は必要である。ところが軍人が席を立つと、急に通訳を省略したりする。そこへ日本側が、靖国問題などきわどい問題についてのプレゼンテーションを始めると、再び通訳が入る。一言も聞き漏らしてはいけないみたいな、緊張感が出てくるのです。

向こう側は一種のチームプレーでございまして、特に北京では我々が行く前に事前のリハーサルをやっていたらしい。ああ言われたらこう言えみたいな、役割分担が決まっております。逆に日本側はもう何の打ち合わせもない。私も全く初めてですから、空気が全く読めないままぶっつけ本番でいく。こういう国際協議みたいな場所では、日本がチームプレーで向こうが個人プレーというのが定番ですけども、珍しいことに中国側がチームプレーで日本側が個人プレーであるわけです。

冒頭のうちは私もまじめにメモをとりながら聞いていたのですが、じきにあほらしくなって、メモをとるのをやめてしまいました。というのは、そこで出てくるような話題は、だいたい中国共産党の公式見解通りです。そうすると当方は黙って聞いているしかない。ところが、その後ディスカッションの段階になってくると、両軍入り乱れているうちに向こう側の本音がポロリと見えるとき

がある。それがなければ向こう側が満足して引き下がるし、そこで何か本音を引き出せると、こっち側がちょっとポイントを稼ぐというゲームなのですね。

「抗日デモ」の正体

それで、一日目の午後ぐらいでしたか、最近日本から帰ったばかりの向こう側の若い研究員が、抗日デモ、我々が反日デモと呼んでいるものについて説明をしているうちに、日本側の質問に答えられなくなり、絶句してしまったのです。そうすると、これは、後から分かったのですけれども、彼女に対する組織内の評価がバツンになるらしいのです。内部の査定みたいなものがあるらしくて、ちょっと気の毒な感じ。そうすると相手側がどうするかと思ったら、彼女の上司が話を引き取って、ちょっと違う話が出てくるのです。

なるほど、こういうふうに関心したわけなのですが、そこで相手側が言い出したことは、「実は中国では抗日デモというのは公式にはなかったことになっている。だから、見てください、我々の文章中では全部かぎ括弧がついているでしょう」と言うのです。なるほどその通りなのです。

それで、「抗日デモ」については我々も随分研究しました。まず中国の歴史始まって以来初めて、あれは学生が主導したのではないデモです。なぜ防げなかったか。昔であれば、若者のほとんどが国営企業に勤めていたのでコントロールできたのだけれども、今はそれができなくなっている。それから三番目に、彼らは貧しくない。ホワイトカラーの人たちです。日常生活に不満があるからやっているのではないというようなことを、向こう側としては言いたいのですね。

反日デモは、恐らく最初に北京で始めたときは官製デモだったのだらうと思います。つまり、旗やのぼりが全部印刷されていたところを見ても、そんな自然発生的なものではなかった。あとは半官半民といいますが、特に上海で起きたものは、当局は止めよう思っていたけれども、止められなかった。

上海は中国では一番進んだ地域である。自分たちはほかの中国とは違う。昔から国際化されてい

たという自負がある。ほかの地域から見れば、うまいことやりがあってという思いがある。その彼らが、一回ぐらいはここで反日の姿勢を示さないと、自分たちは中国人ではなくなってしまう。だからやったのだと。

つまり、中国というのが一種ネーション・ビルディングの過程にあって、ひょっとすると史上初めてかもしれないけれども、中国人というものができつつある。その一つの過程として抗日デモがあったのではないか。日本でよく言われているような、江沢民の反日教育の成果ということではないのかなと、私としてはそういう解釈をしたわけでございます。

相手の意表をついた質問

もう一つ、私は中国経済に関するプレゼンテーションを行ったのですが、最後の部分で、東シナ海の春暁ガス田開発について、こんなことを申し上げました。

日本国内で反中運動をやっている人たちの間では、途方もない説がまかり通っております。春暁ガス田には、原油一千億バレルが埋まっているというのです。一千億バレルというのはイラクの埋蔵量と一緒にですから、常識的にはあり得ない話なのです。推定埋蔵量がどのくらいかはいろいろな数字が出回っているのですが、一番少ないものでいうと三千六百九十万バレルぐらいであると。日本のガス消費量でいえば一月分ぐらいに過ぎない。中国は何でこんなガス田を掘るのですか。経済人としてはとても理解できない。

ほかに資源がないのなら話は別です。ところがサハリンに行けば、だいたい春暁の百倍ぐらいのガス埋蔵量がある。だったら日中共同でサハリン開発をやった方がよっぽどいいじゃないですか。それをしないで中国が春暁にこだわるのは、エネルギー問題ではなくて、日本に領土紛争を吹っかけるためにやっているんじゃないですか。私はそう思うけれども、間違っていたら訂正してほしいというふうに言ったのです。そうしたら、全く返事がなかった。

おかしいな、冗談みたいに聞こえたかなと思って、後でもう一遍、さっきの私の話、真剣に言っているのだからちゃんと誤解を解いてくださいと繰

り返したけれども、それでも返事がない。その日が終わってから気づいたのですが、要するに彼らは、準備していない質問には答えられないのです。チームプレーでやっているから。

ですから、日本側が主張する日中中間線がなぜ間違っていて、中国側がいう大陸棚説がなぜ正しいかという説明は、入れかわり立ちかわり三人も出てきて似たような話をしてくれるのですが、何のためにここを掘っているのという、そういう根本的なところで答えられない。これは一本取ったな、と思いました。ビギナーズ・ラックでしたけれども。

あうんの呼吸がある日中対話

日中対話の中心テーマは、安全保障問題とか日中関係です。そういう話をしていると、空気が凍りついたり、ガッカリするようなことが何度もありました。

そんな中でおもしろかったのは、向こう側で経済をやっておられる先生方との会話でした。というのは、政治、外交、軍事というのは、最初から公式見解が決まっています。中国側の学者は「答えに合わせて途中の式を作れ」みたいな、そういう仕事をさせられちゃっているわけですよ。

ところが、経済学者は恵まれていて、例えば北京でお話しした方は、日本の国土計画、それも一九五〇年代、六〇年代のことを研究されている。日本の国土開発の経験を、中国に転用するとどうなるかといったことを自分のテーマにしている。研究がオープンエンドになっているので、自分で答えを出せるわけです。しかも結論部分を、政策として使ってもらえるかもしれない。会話をしていると、お互いにエコノミストとしての共通言語があることも手伝って、この人たちとなら仲良くなれると、私も思った次第です。

くだらない話をご紹介しますと、私はあるジョークを披露するタイミングをずっと狙っておりました。こんなジョークです。

北東アジアの指導者が四人集まって、だれが一番みんなをあとと言わせることができるかという賭けをした。最初に北朝鮮の将軍が、巨費をかけて核開発を行った。次に韓国の大統領が、その北朝鮮に対して食料と電力の大型支援をする、と言

い出した。それから中国の国家主席は、これまた巨費をかけて宇宙ロケットを打ち上げた。最後に日本の首相は何をしたかという、神社へ行って百円玉を投げた。

このジョークは、さすがに怖くて北京では試せませんでした。上海で会議が終わって宴会になって、上海蟹を食べている最中に試してみたら、一同で大爆笑となりました。受けてから、ああよかったと言ったら、「ここは言論の自由があるから大丈夫です」と言われました。実は北京と上海では、やはり温度差があるのですね。

もう一つ、これは北京と上海の両方で感じたことなのですが、発言に時間制限をするのですね。発言は一人十五分と決まっております、大体十二分のところで司会者がチーンと音を立てる。十五分でもう一遍チーンと鳴らすと、もうこれでやめてねという、シグナルを送るのです。日本人はもちろん素直に従うのですが、中国の研究者もちゃんとチーンに反応することに感銘を受けました。というのは、ほかの国では効果がないことが多いのです。特にインド人とか。ところが、この日中間の会議ではこの時間厳守システムが有効に機能いたしました。大幅に時間がなくなるといったことが最後までなかった。日中対話には、あうんの呼吸があるのです。

気持ちは通じるけど、論理が噛みあわない

実際、中国の研究所の方々と話をしていて、昼間は険悪になる瞬間は何度もあるのですけれども、終わって晩飯になると打ち解ける。実を言うと、同じ会議室に半日一緒にいると、気持ちはすぐに通じるのだけれども、論理がなかなか通じない。日中の行き違いというのはこういうことかなと、自分の肌身で感じることができました。

気持ちは通じたと思うところがくせ者でして、それこそ飛行機の中のスチュワーデスとも目と目で会話ができてしまう。これはほかの国ではめずらしいことですから、ああ、やっぱり日中って近いなと思ってしまいます。ところが、いざ真面目な話をしてみると全然噛みあわない。

ここから先は私が受けた印象ですが、では日中で何が問題なのかを考えていきますと、一番目は言うまでもなく靖国神社の参拝問題がある。二番

目が恐らく台湾の問題であって、向こうは日米が結託して台湾の統一を妨げようとしていると受け止めている。今は歴史認識の陰に隠れていますけど、こちらは戦略の問題ですから妥協しにくいので、本当はこちらの方が根が深いのかもかもしれません。

さらにその次にある問題は何かというと、恐らく日本とアメリカとの同盟関係が一番大きな問題なのではないか。日米が結託している限り、日中関係はうまくいかないのかな、そんなふうに感じた次第です。

結局、日本側が分からなくなってしまうのは、普通日本で外交を考えると、まず国民感情という問題はあるけれども、それはさておいて大事なのは安全保障であり経済であるというような、実利を中心とする議論の組み立てををすると思うのです。ところが、妙に中国とアメリカが似ているなどと思うのは、最初に国民感情というか、まず世論があって、その上に経済や安全保障の問題を乗っけて議論をしていく。国の指導者は、世論から逃れることはできない。そういう大国と小国の違いみたいなのが背景にあるのかな、という感じを受けました。

抗日記念館での三つの発見

今回の出張で収穫だったのは、蘆溝橋の抗日記念館に行ったときの事です。私は個人的におもしろい発見を三つしたと思っております。

蘆溝橋の抗日記念館は、今年の七月七日に大改装を行っております。そのときは、入場無料だったので超満員だったそうですが、私どもが行ったときには入場料十五元を取っておりましたので閑散としておりました。

その抗日記念館で、なぜかアメリカ軍の士官五十人ぐらいが見学しているのです。中国・人民解放軍の兵士が案内役になって、余り上手ではない英語でずっと説明をしていました。有名な蠟人形とかは、今は全くななくなっておりまして、戦史中心の地味な展示になっているのですが、それでも南京大虐殺のコーナーではでかかど「三十万人」と書かれた看板がある。その下でアメリカの士官がぼそぼそ何か言っている。つい聞き耳を立てましたら、こんなことを言っておりました。「文化

大革命は何万人だっけ？」 私は思わずこの同盟国の軍人に対し、心の中で拍手を送ってしまいました。

日中間の歴史問題では、真の主演は西側のメディアではないかと私は思っております。日本はいい加減、中国にいろいろ言われることに慣れてこになっている。ところが、中国が日本を叩けば叩くほど西側には奇異に見えてしまう。何で六十年前の話がそんなに問題なの。それよりもっと二十年前とか十年前に、いろいろ中国ではあったんじゃないのという反応を招いてしまう。中国はそれに対し、抗日記念館も展示方法を切り替えて、西側に対応しようとしている。うまく行っているかどうかは別にして、その辺の中国の素早い反応という点が第一の発見です。

二番目に、日本のA級戦犯の十四人が飾ってあるコーナーがありました。十四人の写真を横に二列、縦に七段に並べてあって、ちょうど壁が出っ張ったところに並べて展示してあるのですね。その横に、この人たちは靖国神社に祭られている、というプロパガンダがされている。そのときは何とも思わなかったのですが、何かちょっと違和感があったのです。何で十四人を縦に並べたのか。

翌日になってから、ずっと同行してくれていた翻訳家の王雅丹さんが教えてくれたんですが、中国には「歴史の恥ずべき柱に永遠に釘づけにする」という表現があるのです。だから、あの十四人をわざわざ少し飛び出た柱に張りつけてあるのだと教えてくれたのです。誰でも分かるものではないけれども、中国人で多少教養のある人なら、ははーんと気がつくようなメッセージなのですね。

そこではっと思い当たったのですが、では、そのA級戦犯十四人の次に何があったかという、日中友好のコーナーなのです。天皇陛下とか小泉さんの写真が飾ってあるのです。深読みすると、我々はこの十四人を永遠に釘づけしたから、もううるさいことを言うな。それさえ認めれば日中友好だというふうに、ひょっとすると抗日記念館のレイアウトは示しているのかもしれない。

これは多くの人に伝えるべき話だと思って、私はそのとき一瞬感動したのですけれども、よくよく考えてみると、そんな分かりにくいメッセージを送ってどうするのよと。というか、それを見

てパッと気づくような日本人はまずいないわけです。先方はひょっとすると、何て文化程度の低いやつらだろうと思っているのかもしれないけれども、それは単なる自己満足ではないか。言ってみれば、中国側は空気を読んで察しろよと思っている。日本側はそのシグナルが読めない。中国側は、俺にそこまで言わせるつもりかと呆れてしまう。これも一つの日中関係の断面なのかなと思いました。

抗日記念館で発見した三つ目は何かといいますと、これは最後に出るところで気づいたのですが、お手洗いの洗面所がTOTOであったということでありました。われわれの仲間の一人が、「何て詰めめの甘いやつらだ」と言っていました。しかしTOTOさんは、非常に中国で成功している企業なのです。私もそれから必ずトイレに入るたびに、どこのメーカーかを注意して見ていたのですが、やはり半分ぐらいはTOTOでした。

実は、抗日記念館をつくるに当たっても、日本企業の資材がなければできないではないか。それくらい日中の相互依存関係は深まっているのだと。私は日中対話においてずっと言い続けていたことは、政冷経熱、政冷が経熱を冷やすとよくおっしゃるけれども、それは逆じゃないですか、むしろ経済の熱が政治の冷たさを溶かすことの方がありそう。むしろ今、もっとも心配しなければいけないのは、鳥インフルエンザなどの理由で経済の熱が冷えちゃうことなんじゃないか。そういうふうに言っておりました。マルクス主義者であれば、多分私の言うことを理解してくれるかと思ったのですが、なかなかそこは認めていただけませんでした。

リニアモーターカーと山手線

ちょっとだけ中国経済についてコメントしてみたいと思います。

印象に残りましたのが、上海のあの有名なリニアモーターカーです。上海リニア、何とあれは乗車賃が五十元もするのです。なぜか貴賓席があって、そっちは百元になっている。でも、全然がらがらですし、わざわざ七分間の旅行のために百元払うという人は余りいません。五十元も払って乗っているのは、半分ぐらいが外国人の観光客という感

じでした。乗ってみたら、やはり最高時速四百三十キロはド迫力でしたけれども、恐らく交通機関としては完全な失敗作ですね。

というのは、どう考えても、一人五十元ずつ集めて採算がとれるはずがない。マイクロソフト社が、ウィンドウズにエクセルという表計算ソフトを入れてから、「このプロジェクトは何年で採算がとれるか」の計算がとても楽になりました。商社の中でも、最近はずぐそういう話になるのですが、どうもそういう感覚が全くないらしい。ということは、恐らくあのリニアモーターカーは巨大な不良債権なのでしょう。

上海の若手の経済学者にそう言ったら、おっしゃる通りなんです。どうやったら採算がとれるのか、もう少し上海市街地まで延ばしてみようかと、そういう話が出ているらしい。それはますます不良債権に追い銭をするだけだから、もうこれは上海の広告宣伝費だと割り切った方がいいよ、と私は言ったのですが。

交通機関の意義は何かというと、大量の人を安全に安く運ぶことであります。恐らく世界じゅうの交通機関の中で、最も成功しているものは山手線だと思います。あんなに安く、あれだけ大勢の人を、二、三分間隔で、事故もなく毎日毎日運行しているわけですから、大変な効率性ですね。では、山手線は世界的に有名か、我々が感謝しているかということ、そんなことは全然ない。なおかつハードウェアとしての山手線は、技術的には大したことなく、普通の線路、普通の車両なのです。それでは、山手線はなぜ偉大であるか。それはソフトとシステムが偉大であるからです。ソフトというのは、駅に立って白手袋をして指差し確認をしている駅員さんたちです。システムというのは、二、三分間隔で運行している時刻表です。ですから、物事というのはついついハードに目が奪われがちなのですが、本当に大事なものは実はソフトでありシステムである。

ところが、ソフトとかシステムは一朝一夕にして育てることはできない。ハードだけは、いきなり三年とか五年で世界の最先端のものをつくることができる。ですから、なるほど、リニアモーターカーは中国経済の象徴だなど。ついついハード指向で、世界最大のもの、世界最新のものを目指

してしまうけれども、採算性とか、交通機関としての目的とかを考えていくと、いろいろな問題が浮かび上がってくる。

ただ、これは上海を案内してくれた経済学者が言っていたことなのですが、もう今は完全に流れが変わっているんです。リニアモーターカーの導入を決めたのは朱鎔基さんでしたけれども、自分もこんなものをつくるよりは、むしろ普通の公共交通機関に投資すべきだったと思う。自動車産業にお金を投じたのも問題だった。それが今の上海の交通渋滞と公害を招いているのだから。ただし、今ここに至って、もう完全に向きが変わっている。成長じゃない、環境重視だ、省エネルギー型社会を作るのだと、国の方針が変わっている。

そういう意味では、もう何でもかんでも最先端を求めるようなマインドセットではなくなっている。そういう話を聞いて、やはり中国はずごいな。八~九%成長を毎年続けている経済は、要するに朝令暮改を繰り返しているわけですが、そのスピード感に対して、なおかつ人々の意識がついていっている。さすがだなという印象を受けました。

日中の三つのギャップ

私のような素人が、日中間のギャップとかを語るのにはちょっと勇気が要るわけなのですが、素人なりに感じたことを述べてみたいと思います。

まず中国の戦略指向と日本の戦術指向ということがあると思います。例えば日中対話において、岡崎研究所に海上自衛隊のOBの方がいらっやあって、海上での海軍同士の協力を提案した。例えば救難、船の事故があったときに、それを日中間でお互いに知らせ合うシステムが今のところは無い。そういったことから始めようと言うわけです。日本人が得意な「できるところからやりましょう」という話なのです。

それに対して、中国側が何と言ってくるかということ、まず靖国問題の解決をと、日中外交三文書の確認をと、高所大所からの意見が返ってくるわけなのです。ですから、日本側が川下から上っていきこうとして、向こうは川上から下りてこようとして、なかなか両者が川中で出会うことがない。戦略指向と戦術指向は、日中の顕著な違

いかなという気がいたします。

二番目に、歴史を鑑とするという中国側の時間軸指向に対し、日本側は空間軸指向といいますが、歴史よりも外国の例に学ぶことが多いと思います。ちょっと話が脱線するのですが、皇室典範改正に関する有識者会議は、女帝を認めるかどうかといった問題についても、イギリスはどうだ、オランダはどうかと外国の例を調べるのですね。しかも、なぜかアジアの例は参考にしない。これが金融改革や規制改革なら不思議はないと思うのですが、自国の皇室のあり方をめぐって外国の事例を調べに行くというのは、なかなか日本は珍しい国だと思えます。

私は、有識者会議の結論に文句を言うつもりはないのですけれども、日本人というのはどうしてそんなにこだわりがないのだろう。これは余り自分たちで気づいていない特色だと思うのですが、そういうところも含めて、歴史を鑑とする国から見ると、こいつらやっぱり変なんじゃないかというふうに見えていると思います。

三つ目が、デジタル指向の中国とアナログ指向の日本という違いがあるのだらうと思います。私は今でも非常に鮮明に覚えているのですが、世界史の授業のときに中国史で岳飛と秦檜の話が出てきたときに、私だったら秦檜に肩入れすると思ったのですが、中国では岳飛は英雄で、秦檜は悪人となっている。恐らくあれと同じ事例が日本史にあったとしたら、「岳飛支持」四割、「秦檜支持」三割、残り「わからない」みたいな、そういうふうな分かれ方になると思うのです。

中国の場合は、いきなり十対〇になってしまう。意見が割れたままにしておく安心できないらしい。その辺が、歴史に接するときの日中の大きな違いだと思うのです。

台湾の光復記念日

最後に、台湾で見てきた米中関係に関する話をご紹介します。

台北に行っていた間に、ちょうど十月二十五日の光復記念日、つまり日本の占領が終わった日がありました。この日の台北は雨で、あちこち行くと必ず「慶祝光復記念日」というでかい看板がかかっているわけです。ただし、国民党の時代とは

違いまして、もはや祝日でもありませんし、人々がそれを慶祝している姿も見えないのですね。強いて言えば、国民党本部は派手な看板を掲げていて、抗日の英雄を展示していたようですけども、そんなにお祭りムードという感じではなかった。

この日に陳水扁総統がこんなことを言ったのです。光復記念日とは、台湾が中華民国に返った日のことではない、台湾が台湾人の手に戻った日なのだ。台湾人が自分たちを主人公にできたことが光復の最大の意義であって、台湾が中国に復帰したことでは絶対でない、そういう言い方をしておりました。

その日の夕刻、台北の地元のニュースを見ておりましたら、このニュースの扱いは三番目ぐらいでございました。どうも光復節みたいなことは、もう台湾人の心の中にはないらしい。そうかと思うと、その翌日の新聞では馬英九国民党主席が、民進党は光復節を記念しないのでけしからんとか、そろそろ尖閣諸島問題で日本に対して声を上げるべきだと言っている。台湾も尖閣諸島の領有権を主張しているので、やはり反日は中国と台湾を結びつけるカードの一つなのです。

そうかと思うと、中国側がこの日に何をやってきたかといえば、「台湾同胞が激しい闘争を繰り広げて日本の侵略者に深刻な打撃を与えた」みたいなことを言って褒めたたえている。抗日記念館でも台湾の抗日運動を称えているのですが、はっきり言って太平洋戦争中にそういう事例はほとんどありません。ですから言葉の上だけですが、とりあえず台湾全体を持ち上げることによって中台の接近を促そうと、リップサービスをしている。

ところが、同じ十月二十五日に何があったかといいますと、台湾が国交を有している数少ない国の一つであるセネガルが、中国との国交を樹立して台湾と断交した。どうやらお金で転んだらしい。中国の台湾に対するアプローチというのは、かくも硬軟取りまぜたものであって、いやが上にも陳水扁民進党政権の孤立感を増しながら、なおかつ国共合作を目指している、こういう仕掛けになっております。

これを民進党の側から見ると、本当に手詰まりという感じです。陳水扁政権というのはもう五年目で、支持率は今二五%まで低下しております。

しかも、立法院、台湾における議会は野党が多数派でありますので、政治課題が全く動かなくなっている。なおかつ、もともとクリーンな政党というイメージがあった民進党に金権腐敗が起きて、評判を下げてしまった。

アメリカから台湾へのメッセージ

私が出席した日米台三極対話では、アメリカからロビン・サコタとランディ・シュライバーという、アーミテージ前国務副長官のグループの若頭格というのでしょうか、清水の次郎長一家であれば大政・小政みたいな人が入っていました。

ランディ・シュライバーは国務省でアジア太平洋担当次官補をやっておりましたので、台湾でも発言が目立っていました。彼が公的な場所でどんなことを言ったかという、今や米中関係は相互確認破壊の経済版であると。相互確認破壊とは、昔の米ソ間の核戦略でMAD（マッド）と呼ばれていたものです。お互いにお互いを攻撃できないような状態に身を置くことで、平和を守ろうというアイデアです。何となれば、中国はアメリカ国債をガンガン買ってくれるので、財政赤字をファイナンスしている。おかげでアメリカは増税なしに財政赤字を増やしている。これでアメリカ側の対中カードがある程度は失われていると、聞きようによってはドキッとするようなことを言うわけです。

その一方で、台湾が統一派と独立派に国論が分かれていることは、台湾の安全保障を危うくしている。こんな基本的な問題で分裂を抱えた国がほかにあるかと。というのは、台湾の政界でずっと問題になっておりますのが、アメリカからの武器購入なのですね。特別予算の問題は三極会議でもずっと出ていた話なのですが、パトリオットミサイルとかP3Cとか、そういった武器の購入を台湾に働きかけている。ところが、これがとんでもない金額でありまして、台湾の名目GDPでいうと3%ぐらいになってしまう。ですから日本でいえば、十五兆円の予算で武器を買えと言われていたようなものです。この特別予算案が通らない。野党が多数の立法院で何度も否決されておりました、たまたま十月二十五日には三十四回目の否決を食らっている。

つまり、アメリカは、もう余り台湾の面倒を見られないから、当てにしないでねと、独立したいと思っても僕らが助けに来るとは思わないでねというような冷たい言い方をするわけです。その場合も、せめて自分で自分を守る努力ぐらいは見せてちょうだいねと。ところが、そのためにアメリカ製の武器を買うというところで台湾はつまづいてしまっている。その間に海峡の反対側で中国のミサイルというのはもう七百基近くまで増えている。二〇〇五年一月に行ったときは四百八十基と言っていたのが、もうそんなになっている。

一九九六年の台湾海峡危機のときは、アメリカの空母が出動して事なきを得たわけです。しかし、これだけ中国の潜水艦が東シナ海をうろろしているようになって、同じことができるのか、例えば二〇〇八年の総統選挙にまた同様な危機が起こったとして、果たしてアメリカ軍が出て行けるかという、これはかなり怪しい。

アメリカが苦しい理由

そうすると、台湾側に妙な誤解というのでしょうか、希望的錯覚というのでしょうか、アメリカが頼りにならない分、変に日本が頼もしげに見えるという心理があるようです。何となれば、彼らの目から見ると「小泉さんってすごい」。例えば外交のことを全く言わない選挙であれだけ勝てちゃうということで、陳水扁総統がびっくりしたそうでした、すぐに部下に命じて、あの選挙のことを全部調べると。やみ夜で出会った一筋の光のように見えてしまったのだそうでございます。

なおかつ日本経済ってかなり良くなっているみたいだし、ひょっとするとアメリカが当てにならない分、日本が当てになるのかなというような、そんな感じさえあるわけです。

もう一つ、アメリカの苦しい事情を察するエピソードをご紹介しますと、ロビン・サコタというアーミテージ一家の元締めがよくこんな話をするのです。

中台海峡の話をするときに彼が一つ話にしているのは、柔道の教えなのですね。彼は日系人の家庭の出で、お父さんは黒帯の四段だったのだそうです。息子に柔道の稽古をつけていて、あるときこんなことがあった。お父さんが息子を羽交い締

めにして、とにかく手も足も出ない状態にしてしまったのです。そこで少年は、「パパだったらここでどうするの」と質問する。恐らくお父さんは、すごい返し技を教えてくれるんじゃないかと、ロビン少年は思ったのでありますが、そのときお父さんが教えてくれたのはどういうことだったかという、「うん、わしならまず絶対にこんな体勢にはしないな」。そういうエピソードです。

中台海峡の問題も、つまるところそれだ。そういう絶望的な状況にみずから置かないようにせよ、なってしまってからでは遅すぎる。こういう話を彼は以前と同じように繰り返していたわけなのです。

ただし、今その話を聞くと全然違ったふうに感じられてしまうのは、それって今まさにアメリカ軍がイラクで陥っている状態にほかならないじゃないか。どうやったらこのイラクから撤退できるのという、まずそもそもこんな状態にしてしまったのが間違いだったよねと、言わざるを得ない。結局、イラク問題があるからこそ、中台海峡の問題においてもアメリカは気前のいいことは言えなくなっている。ですから、そこどころが今のアメリカの大きな変化なのだろうと思います。

ゼーリック演説が結ぶ米中関係

では、その分のアメリカは米中関係をどうしているかという、一言で言ってしまうと、九月二十一日に行われたゼーリック国務副長官の演説が今の米中関係のベースになっているようです。このゼーリック演説のことは、中国の偉い人はそこらじゅうで口にするようになっている。台湾では余り注目されていなかったもので、そうすると、リチャード・パールという、事実上のアメリカ大使が、わざわざこういうものがあるよと強調している。それぐらい重要な文書だということになっている。この間、九月に世界平和研で行われまして王毅大使の講演でも、このゼーリック演説のことを何度も何度も言及されていたのが印象的でした。

この演説は、米中戦略対話で言っているような内容をそのまま文書化したものであって、ここに書いてあるような線であれば中国はオーケーであると。そこには何と書いてあるかといいますと、

「中国はレスポンシブル・ステークホルダーたれ」という言い方になっています。

このステークホルダーというのが極めて今風のアメリカ的な言い方であって、中国国内でも評判がいいようです。日本語にすると、「責任ある参加者であれ」と。つまり、国際社会にただ乗りするのではなくて、ちゃんと責任感のあるプレーヤーであれと。その中には知的所有権の問題とか、軍備拡大の透明性の問題とか、いろいろなものが入ってくる。もちろん通貨制度改革も入ってくる。

そういう現実的なアプローチをベースとしながら、ときどき十一月十六日にブッシュが京都で行ったように、「アジアでも自由が大事なのだ」というような本音をちらつかせる。これが今のアメリカの対中姿勢であって、政治的には中国への関与を進めるけれども、軍事的には警戒を怠らないぞと、そういうことになってくるのではないかと思います。

米中の親和性をどう見るか

最後に、米中関係についての私見を述べますと、米中の親和性というのでしょうか。意外とあの二つは似た者同士だぞというのは、これはいろいろな方がご指摘になっていることです。

つまり、日米というのは基本的に異質な者同士であって、どうも食い違う。あるときひょっとすると米中が蜜月になってしまって、そのまま日本は頭越しというか、置いてきぼりになるのではないかと、そういう懸念をよく聞くことがある。それは、米中のどちらも自国が世界の中心だと思っているし、外交政策が、自国の環境ではなくて国内の世論で決まってしまう。中国に世論なんていうものがあるのかという、私も本当にはよくわからないのですけれども、どうもそんなふうに見える。

米中の違いは何かというと、強いて言えば、アメリカの世論というのが非常に透明であって、常に外から見える形で動いているのだけれども、中国は世論が外から見えにくい。実際に外交の場で米中両国が話し合うと、とても話が早い。お互いに自国は何がしたいかということがよく分かっている。

そこへいくと、日本という国はそもそも政治的

意思がどこにあるのかがさっぱりわからない。何しろBSE問題でも皇室典範の問題でも、政治家が決めるのではなくて学者の第三者機関に丸投げしてしまうという、不思議な国でございます。こんな国とつき合うのは難しいと思うのですが、一方で、そういうふうな似た者同士の米中であるからこそ、遠い将来において対立するのだろうなとも思うのです。

では米中が対立するような時代になったときに、日本がどっちにつくかというのはやはり大事なことであると思います。普通に考えたら、中国がア

メリカに勝つ目というのは余りないわけなのですが、一つだけ日中が水も漏らさぬくらいに協調するようになると、逆転の可能性が出てくる。逆に言うと、日本がアメリカに今のようにベタッとくっついていれば、中国の拡大をある程度でとめることができる。結局、日米中の関係とはそういうことなのかなというのが、今の時点での私の非常に雑駁な印象でございます。

ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

< From the Editor > 「ソートリーダー」論

今頃になって、昨年12月7日に麻生太郎外務大臣が日本記者クラブで行った「わたくしのアジア戦略 日本はアジアの実践的先駆者、Thought Leaderたるべし」という演説を読みました。全文は外務省のHPの中にありますので、参考まで。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/17/easo_1207.html

麻生外相は、アジアにおける日本の立場を以下のように定義しています。

ご列席の皆さん、日本とは第一に、アジア諸国にとっての「実践的先駆者」でありますし、またあらねばなりません。

耳慣れない言葉が出てきたと思われたとしたら、これは近ごろのビジネス英語にいう「Thought Leader」という言葉の、わたくし流の訳語であるからです。

「ソートリーダー」とは、この言葉が生まれた米国ビジネス界での正確な定義はいざ知らず、わたくしに言わせれば、他人(ひと)より先に難問へぶち当たらざるを得ない星回りにある者のことです。難問であるからには、なかなか解くことができません。けれども解決しようとしてもがく、その姿それ自体が、ほかの人たちにとって教材となるような人。そういう人を「ソートリーダー」といいます。

「成功のみならず、むしろ失敗例を進んでさらけ出す」タイプの人、国を指すのであって、「実践的先駆者」と訳さなければならぬゆえんです。ただし、失敗をさらすには勇気がいる。日本にはそれだけの雅量があることを前提にしたうえで話ですし、もちろん失敗ばかりでなく問題解決の手並み鮮やかなところも、できれば見せたいものであります。

日本という国は、19世紀からアジアの先頭を走ってきた。そのために「ナショナリズムの高揚」や「自然環境破壊」といった問題に、最初に直面せざるを得なかった。問題の克服には、かならずしも成功したわけではないが、それでも日本はアジア諸国にとって、「問題にいち早く直面し、また取り組むことによって、範を示す国であり続ける」という役割を担っている……。日本という国の定義づけとして、面白いアイデアだと思います。

他に日本が直面した危機としては、70年代の「エネルギー危機」や、80年代の「貿易摩擦」、さらには「大幅な通貨切り上げ」なども加えることができるでしょう。これらに対しては、幸い日本は解決策を示すことが出来ました。逆に反面教師となったのは、90年代の「金融不安」への対応でしょう。これらの体験は、他のアジア諸国、とりわけ中国にとって重要な判断材料を与えるに違いありません。

ちなみにWikipedia によれば、"Thought Leader"という言葉の定義は下記の通りです。

Thought leader is a buzzword or article of jargon used to describe a person who is recognized among his or her peers for innovative ideas and demonstrates the confidence to promote those ideas. The term can also be applied to companies, usually small businesses.

According to commentators such as Elise Bauer, a distinguishing characteristic of a thought leader is **"the recognition from the outside world that the company deeply understands its business, the needs of its customers, and the broader marketplace in which it operates."**

たとえば、「トヨタ自動車は、自動車業界のソートリーダーである」というのはあんまり適切ではなく、単にリーダーと呼ぶべきでしょう。ところが、「セブン&アイは、流通業界のソートリーダーである」というと、かなり本質に迫れるような気がします。単なるリーダーではなく「ソートリーダー」と呼ぶからには、「業界最大手でなくても、ユニークな経営手法やアイデアを持ち、他人が意見を求めたくなるような存在」でなければなりません。

牽強付会かもしれませんが、麻生外相はこんな風に言っているようにも聞こえます。

「中国はアジアのリーダーを目指すかもしれないが、ソートリーダーにはなれないだろう。日本は単なるリーダーにはならないけれども、アジアのソートリーダーを目指すのだ」。

日本外交の方針を示すのみならず、日中の目指す方向の違いを表す点でも、「ソートリーダー」は有力なコンセプトであると思います。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com